

U-キャンパス

- 子育て世代に向けた循環型の教育都市 -

「うらわ commons」を、まちに展開することで、浦和の文教都市としてブランドを高める「U-キャンパス」を実装します。U-キャンパスは、①景観形成、②自然環境、③交通基盤、④コミュニティ、⑤循環促進の5項目を基本方針として定め、2050年に向けたまちの将来像を提案します。

「うらわ commons」とは・・・
U-キャンパス内に散りばめられた教育をサポートする新たなサードプレイス
「U-キャンパス」とは・・・
浦和の地形を活かした、子育て世代のための循環型の教育都市



子育て世代に選ばれるまち

ポテンシャル
都心への一極集中が進み、洗練された伝統と感性豊かな文教都市として、ファミリー層を中心に人口が増加しており、今後もその傾向が続くとみられる。その結果、人口密度も全国TOP10位（東京23区、大阪市内を除く）と非常に高く、衛星都市として機能している。

課題
許容できるキャパシティを超えつつあり、交通の危険性が顕在化している。そのため、交通基盤の整備とモビリティの革新に加え、都市のレジリエンス性を高めることが課題となっている。

教育熱心な文教都市

ポテンシャル
中山道を中心に浦和御殿（現在の常盤公園）や調神社、浦和宿本陣跡等、江戸時代から宿場町として発展した面影が残っている。また、明治期の中山道西側をみると、文化・教育機能が集積されており、現在まで文教都市として発展している。加えて、大正以後は「鎌倉文士に浦和画家」として、芸術の街として親しまれ、コルソの壁画や町中の彫刻等が街に溶け込んでいる。

課題
教育・芸術の価値の見直しや風格のある多彩な文化を昇華するリ・デザインが求められている。

谷と台地からなる豊かな地形

ポテンシャル
都市の成り立ちをみると、浦和は大宮台地に位置し、南北の尾根筋に沿って中山道や国道が延び、東西は生活道路によって結ばれている。浸食谷は別所沼や白幡沼となり、現在は市民のサードプレイスとして憩いの場となっている。

課題
それらの緑や水のネットワークを面的に結び合わせ、大宮台地の丘にあたる浦和駅や県庁エリアの再整備、災害時のBCP機能の拡充や広域拠点の整備が求められている。その為、Society5.0時代に合わせた都市基盤と公共空間のアップデートが必要である。



2050年を見据えた浦和の将来像

『U-キャンパス』と『うらわ commons』

『U-キャンパス』とは
浦和の地形を活かした、子育て世代のための循環型の教育都市を指します。

『うらわ commons』とは
U-キャンパス内に散りばめられた教育をサポートする新たなサードプレイスを指します。

浦和らしさを活かすマスタープラン

浦和の特徴を活かした以下の3つの視点を基本骨格とします。

【教育】街中に展開する教育エリア
街中に自発的な学習を誘発する「うらわ commons」を散りばめることで、街全体がキャンパスとなります。

【交通】歩車共有による安心安全のまちづくり
中山道を含む主要幹線道路に高速モビリティを集約し、その内側をスモールモビリティと歩行者のための空間とします。

【地形・自然】谷地を活かしたネットワーク
谷地形の集水性を利用し、緑と水のネットワークを構築し、人が集まるサードプレイスの核を形成します。

浦和の豊かな地形を活かして、文教都市としての浦和ブランドを強化する

まちづくり VISION の制定
これらを実現するために、以下の5項目に分け、まちづくり VISION を制定します。

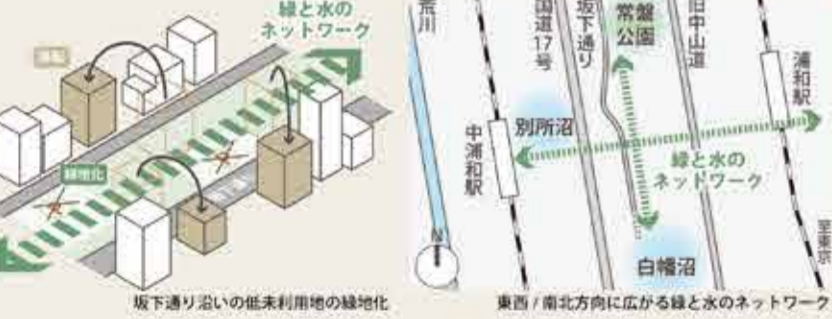
- 景観形成** 低未利用地を活用し、谷の景観を再生します
- 自然環境** 自然環境を再生し、市民の憩いとなる場を提供します
- 交通基盤** Society5.0時代における歩車共有を目指します
- コミュニティ** 自発的学習の場を整え、かつ浦和を世界に発信します
- 循環促進** 住まい環境を支え、人々の循環サイクルを促進します

I 景観形成

浦和の地形と低未利用地を活用し、谷の景観を再生します

低未利用地を利用した緑と水ネットワーク

谷に現存する駐車場及び建物を移転した跡地を緑地化することで、谷の景観を再生します。また、常盤公園（旧浦和御殿）と白幡沼を結ぶ南北軸、浦和駅から別所沼・中浦和駅を結ぶ東西軸を形成することで、緑と水のネットワークとします。



地形と連続する建築デザイン

老朽化する建物（埼玉県庁舎及び駅前商業施設）の更新にあたって、洪積台地の段状地形と連続する屋上テラスをデザインします。二つの屋上テラスは互いに向かい合い、浦和の景観を、統一感を持ってよりよくします。

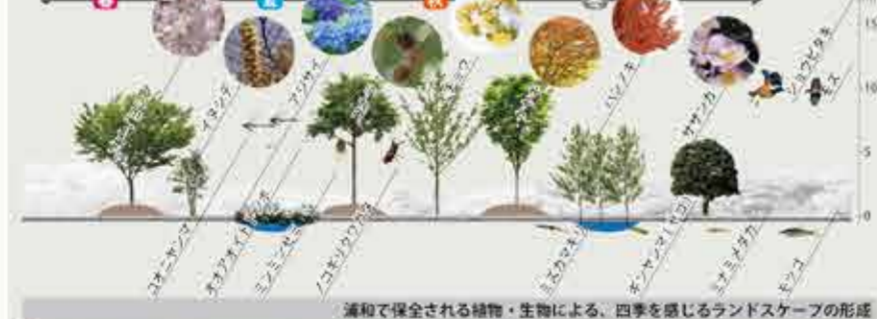


II 自然環境

自然環境を再生・再構築し、市民の憩いとなる場を提供します

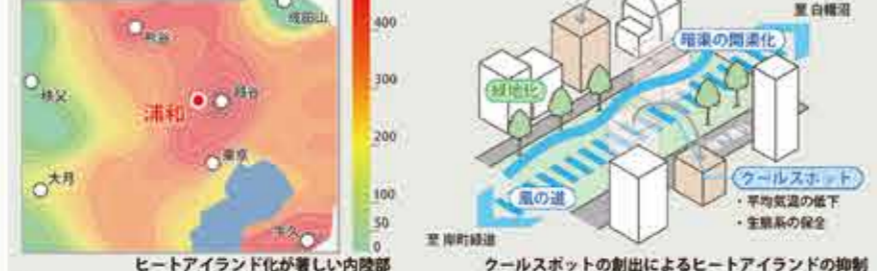
四季を感じられるランドスケープと自然との共生

浦和の植生に基づき樹種を選定し、緑と水のシンボル軸を中心に、四季を感じられるランドスケープを実現します。また、大学の研究施設、NPO法人、近隣の小・中学校高校と協働し、植物だけでなく、動物・昆虫等の生態系を保全し、人と自然が共生できる環境を提供します。



環境整備によるヒートアイランドの抑制

現在の岸町線を経由して白幡沼に水を溜め暗渠を開業するとともに、緑地化し、風の通り道をつくることで、都市のクールスポットとし、ヒートアイランドの抑制を図ります。



都市のレジリエンス化と親水空間の創出

谷の集水性を利用して段丘上の街を冠水から守ります。護岸形式は段状にデザインすることで、増水時の調整機能を持たせるとともに、人々の憩いの場となる親水空間を実現します。



III 交通基盤

Society5.0時代における歩行者とモビリティと共存を目指します

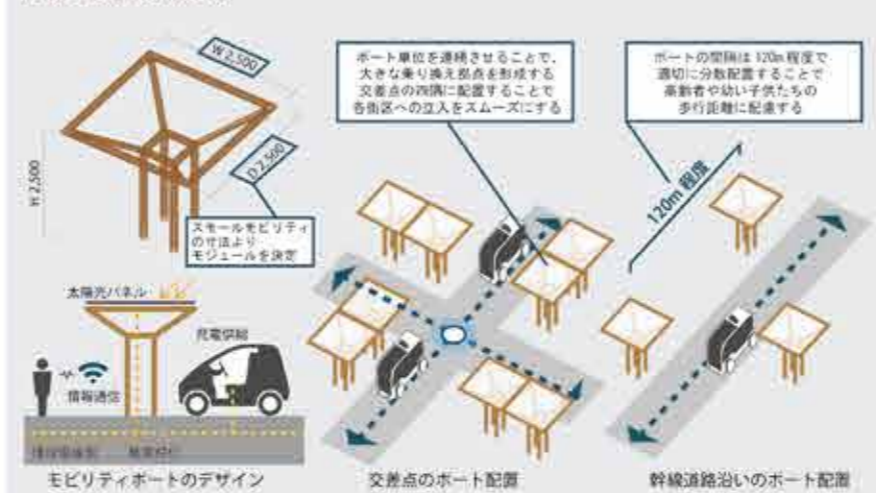
道路空間のオープン化

スマートモビリティ導入と自動運転化により、車両交通量を削減し、道路空間を再配分することで、歩車共有を目指します。2030年までに幹線道路では50%、路地では100%ウォークアブルエリアに転換することを目標とし、道路に人々の活動が創出されることを目指します。



まちに溶け込むモビリティポートのデザイン

新たなモビリティ・ポートには浦和版 MaaS、マルチモーダル交通体系を導入し、高速モビリティから低速モビリティへのシームレスな乗り換えを可能にします。ポートはスモールモビリティに合わせたモジュールでデザインし、ラストワンマイルの目印として、街中に散りばめられます。



IV コミュニティ

自発的学習の場を整え、かつ浦和を世界に発信します

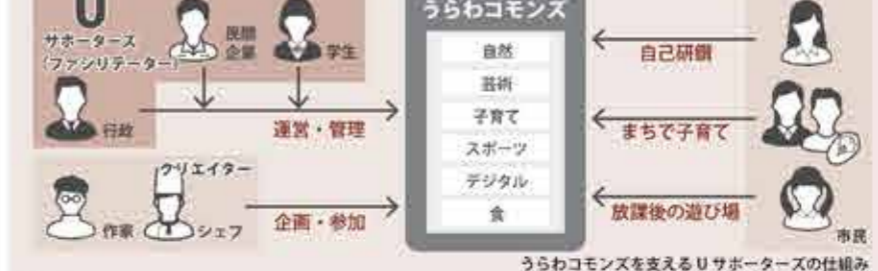
多様化するニーズに応える『うらわ commons』

子供たちはもちろん、大人たちも協働でき、様々なテーマを持つ『うらわ commons』を設置します。またセンシング技術を用い、アプリを通して位置情報と使用状況を可視化することにより、これらの利用率と防犯性を高めています。



『うらわ commons』の運用体系

『うらわ commons』は、活動の運営・管理を行うまちづくり団体リサポーターズ（ファシリテーター）、活動を企画・参加するクリエイターとそれに参加する市民によって成り立ちます。



情報を世界に発信するモビリティ「KOKUBAN」

スモールモビリティを、まちの掲示板としての役割を果たす「KOKUBAN」としてデザインすることで、『うらわ commons』での活動を自由に発信できる機会を提供します。

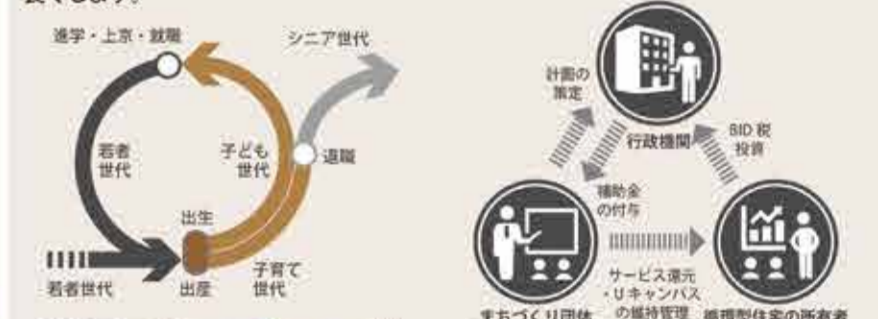


V 循環促進

住まい環境を支え、人々の循環サイクルを促進します

人々の循環の促進

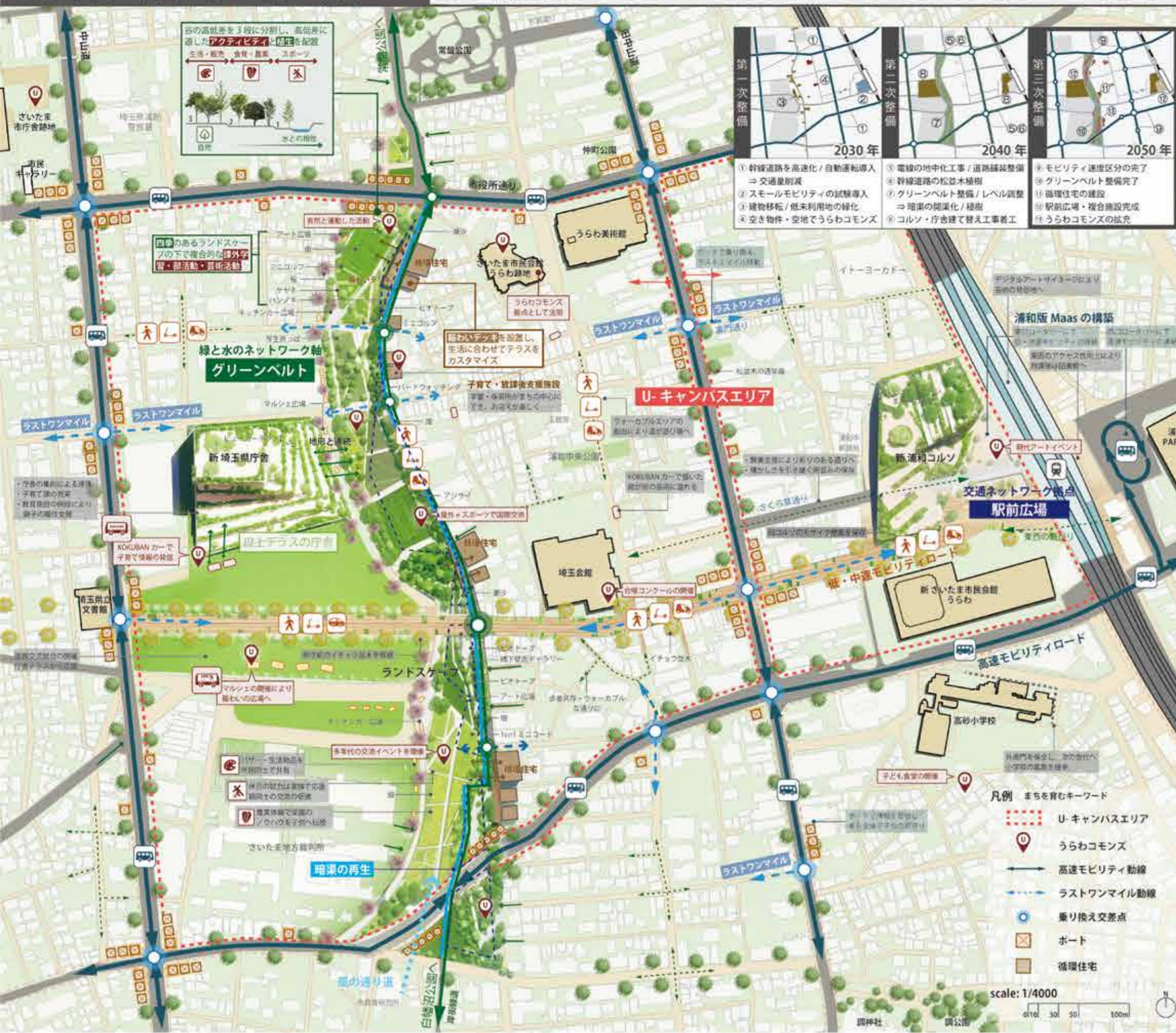
この場所で育った子供が、大きくなり上京、結婚し、再び帰ってきて子育てをすることになった新たな人材を育てる/輩出するサイクルを促すために、子育て世代をターゲットとした、循環住宅を設置します。また、行政機関・教育機関・民間企業の三者で子育て環境をより良くします。



子育て世代の暮らしを支える循環住宅

循環住宅では、資料の一部を低層部の子育て支援施設・まちづくり団体拠点の活動・整備に充てることで、子育て世代の暮らしを支え、人の入れ替わり立ち替わりの促進を図ります。また、住宅は、県産の木材を活用により脱炭素化を図ることで、魅力的な住環境を整えます。





【交通の要衝】
浦和駅を挟んで、東側を高層モビリティの乗り換え場、西側を低層モビリティの乗り換え場とします。これにより、浦和駅周辺は交通の一大拠点となり、距離や目的に応じて適切な移動手段の選択が可能になります。

【キャンパスの玄関口】
既存の商業機能に加え、アトリウムなどのうらわ commonsを複合することにより学生の放課活動の場を築きます。さいたま市中央図書館及びさいたま市民会館うらわと近い位置に、文化・芸術がふれ出す広場を創出します。

【地形との調和】
既存の伊勢丹・コルソを覆うように段状の屋上テラスを形成し、丘のような複合施設を創出します。段状の屋上テラスと連続するようにサンクンガーデンをつくり、駅前東側広場と同じレベルをつなげることで、東西の乖離を解消します。

既存の伊勢丹やコルソを段状に減築して、丘のような駅前広場とします。市民や来訪者の活動の場であり、浦和の新たなランドマークであり、BCPの拠点としての機能も担う象徴の場となります。まちの魅力をもさらに磨くゾーン② 坂下通りのグリーンベルト化 U-キャンパスの軸となる市民に開かれた緑と水のネットワークの形成し、うらわ commonsを展開します



【行舎の集約・中庭の開放】
分棟になっている行舎を集約し、多職種の連携を強化しながら、新たに生まれた緑地を公園として市民へ開放します。

【高さごとの活動と植生】
高さごとに異なる活動と植生が連続し、複合的な活動を促進させます。



歩いて楽しいを実現するまちのシーケンス



変化に柔軟な都市にアップデートする全体のイメージ

